

はじめに

放射線治療は、X線、粒子線などの放射線を用いる治療で、対象となる疾患の98～99%が悪性腫瘍（がん）です。がん治療の三本の柱の1つで、世界的にはがん患者の約半数が治療経過中に放射線治療を必要とし、米国では半数以上が放射線治療を受けています。

しかし、日本で新たに放射線治療を受ける患者数はまだ年間がん罹患数の約24%にとどまっており、厚生労働省の2025年の「がん初回治療の受療者数」推計では、手術約47万人、薬物療法約30万人に対して、放射線治療は約11万人でした。また、再発・転移・緩和治療を含む年間放射線治療患者数は、日本放射線腫瘍学会の2023年の調査で約23万人と推計されています。

しかし将来的に厚生労働省は、2040年には2025年と比較して、手術療法は約95%に減少する一方、薬物療法は約115%、放射線療法は約124%に増加すると推計しています。

それには2つの理由があると思います。1つは放射線治療が近年の技術革新により、他のがん治療と比較し、少ない負担で良好な効果が得られる治療となっていること、もう一つは人口の高齢化です。現在においても、がん患者の約80%が高齢者で、ガイドラインでの「標準治療」が行えない身体機能が低下した高齢の方が増えているからです。

本書の初版発行から10年が経過しました。この10年で放射線治療の内容、対象となる患者さんの状況は大きく変化しています。治療は高精度化・複雑化し、正しい知識をもたないと対応できなくなってきました。

本書は、初学者からベテランまでを広く対象に、がん放射線治療の基礎や原理から方法、代表的な疾患での治療・看護ケア、セルフケア指導の実際、有害事象対策を網羅し解説しています。

本書により読者の皆様が放射線治療の理解を深め、より良い看護ケアを提供することで、多くのがん患者さんが恩恵を受けることを期待しています。

2026年8月

編者を代表して 唐澤久美子